

# 対話の技法

大村伸一

一つ前の駅からこの駅に着くまでのことはいつもよく憶えていない。急な山の斜面にそって列車が登ったり降りたりを繰り返していたこと、途中、何本もの列車とすれ違ったこと、そういう断片的な記憶は残っているのだけれど、それが一つにつながることはなかった。

この駅で降りる乗客は他に数人いたが、お互いのことは何も興味がないのだというように視線をわざとらしく逸らして駅の改札に足早に向かってゆく。私は降りたその場所に少したずみ、電車がまた動き始めるのを待った。構内アナウンスはなく、発車の警告音が響く。機械仕掛けの車輪が回転し車両が動き始めるその音を目を細めて聞いた。やがて列車の音が遠ざかると、私は改札口に向かった。

この町と同じように小さな駅から外に出ると、今日の予定で頭が一杯になる。今日は顧客を三件回ることになっている。一人目は、若い男で取り引きを始めてからもう一年半くらいだ。二人目は、昨日、話を聞かせて欲しいと会社に電話してきた女だった。主婦らしいが、何が欲しいのかはまだ分からない。そして、最後は社長だ。この町ではよく知られた町工場の社長は、大口の顧客だった。今夜は、どこかに連れて行ってくれると前回約束していたが、果たしてその約束を憶えているだろうか。

一人目の男は外回りの仕事をしていて、会うときは大抵喫茶店になる。今回は私が先に着いたのでしばらく待った。一年半前最初に会ったとき、男が言葉に慣れていないのはすぐに分かった。はじめは自分からは何も話そうとしなかったが、質問を続けると少しずつ話し方が分かってきたのだろう、自分から話をするようになった。彼によると、今の会社に採用され何ヶ月か研修を受けてきたのだが、これからどの部署に配属を希望すればいいのか悩んでいるのだと言う。しばらく話を聞いた後で私はいくつかの言葉を選び、試供期間のことを説明してから渡した。言葉を手に入れて落ち着いたらしい男とその後一時間程話をしたが、彼は私の仕事にとっても興味を持ったようだった。勿論、社交辞令ということもあったのだろう。別れるときには、こんなに対話をしたのに全然お金がかからないんですかと、改めて聞かれた。誰もがそれを気にするのだが、実際にはそれほど話しているわけではない。私はいつものようにそうですとだけ答えた。

それから一週間の後、言葉が尽きる頃に再び会いに行くと、男はとても満足したと言い、同じような言葉を二週間分注文してくれた。外回りの仕事に配属を希望したのだとも言った。その日、男は赤いネクタイをしていたが、それが私の真似をしていたのだと気づいたのは、それから数回会った後だった。その日から今まで、男の注文が途切れたことはない。会社の調査によると、他のセールスからは買っていないようだ。ただ、男の注文する言葉は次第に高価なものになっていて、就職して三年目の男の収入でまかない切れるのかどうか、ここ数ヶ月、私は怪しみ始めていた。

約束の時間に二十分ほど遅れて男が店に入ってきた。頭に包帯を巻き左目には眼帯をしている。事故にでもあったようだが、私はそれには触れないようにした。彼もそんなことなどないかのように話し始める。

「遅れてすみません」

そう言う声は氣力に溢れていた。私は気にしなくてかまわないと応えた。

「おかげさまで、仕事は順調です。今日も、出先で商談が一つまとまりまして、それで遅れてしまいました」

そう朗らかに男は言い、それから私たちはお互いの近況を少しずつ話した。

やがて話が途切れると話したくてうずうずしているのが分かったので、その包帯はどうしたのかと尋ねた。すると、聞かれるのを待っていたのを隠しもせず大きな笑みを浮かべて彼は話し始めた。

「ひどい目にあいました。最近、この辺りに野生の獣が出没するようになったんですよ。それに襲われたんです」

「熊かなあ。一瞬だったので分からないんです。傷口に残っていた体毛から、医者は黒豹に襲われたみたいだと言っていました。こんな山奥に黒豹がいるはずはありません」

そして彼は左目の眼帯を少しずらして、そこにもう眼球がないことを見せてくれた。顔を近づけ眼球のあった場所を覗き込むと、彼の背後にある喫茶店の窓ガラスに光が反射しているのが見えた。深い傷ですねと心配して見せると彼は満足したように微笑み、どうということはありませんと言った。

支払いのとき、彼はためらいながら代金をテーブルの上に並べた。小銭が混じっていたが丁度の金額だったので私は少し安心した。それでも彼の手はなかなかテーブルの上の金から離れなかった。思いついて、喫茶店の代金は私に任せるように言うと、彼はようやく手を離した。そして次の用があるのでと言って店を出て行った。

私はテーブルに手帳を広げ、売った言葉とその金額を記録してから、次回の支払いは無理かもしれないと書き添えた。

問い合わせを受けた主婦の家は歩いて二十分ほどの山中にあった。険しい山道であり歩くより他に手だてはない。それでも約束の時間より少し早く着いたので本社に連絡を入れ、この客の新しい情報を問い合わせた。上司の掠れた声が、この女には他のセールスからのかなり長い購買履歴があることと、亭主は十分な稼ぎがあるから支払いは心配いらなだろうと、いうことを教えてくれた。こんな山奥に斜面を広々と切り開いて建てられた家を見たこともないほど大きいのが、それが目の錯覚を利用した建築技法だということはよく知っていた。二年前、この地区の担当になったばかりの頃は、この錯覚に騙されて幾度も山道を迷ったものだ。他の地方で見かけないその錯覚建築の技法は、大昔、このあたりを支配していた豪族が外敵から身を守るために編み出したのだと言われている。もはや外敵などどこにも居はしないのに、人騒がせな建築技法だけが残されたのだ。見かけほど大きな家ではないにしても、錯覚建築で家を建てるにはそれ相応の資産がなくてはならない。確かに支払いを心配する必要はなさそうだった。私は門の呼び鈴を鳴らした。

私を迎えた女は上司の情報の通り若く、本人にはそのつもりがないのだろうが自然と誘惑するように視線をあわせないでいる。人と話をするのに慣れているのは唇がすこしも乾いていないので分かった。情報にはなかったが、小柄で痩せた女だった。

名刺を渡すと読み方が分からないのだろう少し考えている。名刺にはわざとふりがなをふっていない。初対面の相手に名刺を渡すとき、最初は読み方を教えないと決めている。名刺を見て少し悩んでから正解を伝えると、名前を確実に覚えて貰えるからだ。

「めつぼしさんですか」

そう尋ねられてから、それは実は「ほろぼし」と読むのですと教えた。女はああそうと言い名刺をポケットにしまった。残念なことあまり名前には興味がないようだった。それから、しばらくはこの辺りの様子を聞き、尋ねられるままに町の話などをした。やがて話が尽きて女が自分の歯で自分の指を噛み噛み跡でなにかの言葉を残そうとしているのに気づいたとき、用件を尋ねた。女は寒くてたまらないというように体をすくめ、話した。

「もうずっと買い物にも行っていません。人と話をするのが怖いのかそれとも一人でいるのが怖いのか、自分でもよく分からなくなっているのです。外に出ればお店や路上で他の人と会い視線を交わすでしょう。私にはそんなこと耐えられそうもありません。でもこうして一日中家の中にいて森の中を吹き抜けてゆく風の音だけを聞いているのも気が狂いそうになります」

そんなふうに分の不安を話し続けている間、女は私の方を見ず下を向いたままだった。指に刻まれた言葉は見えなように手を隠している。それでは何もわからないので一時間ほどそうして話を聞いた後で、私には彼女に合う言葉の持ち合わせはないと告げた。できるだけ早く医者に行くことさえ提案したが、彼女は頭を振り弱々しく拒絶するだけだった。次の約束があることを理由にいとまを告げようとする、彼女は私の手を取り離そうとしない。仕方がないので、私は彼女がこれまでに結構な数の言葉を買っていることを知っていると明かし、あなたのお話された状態はあまりよくない言葉を使ったせいで起きる症状そのものだから、すぐにでも医者に行くべきだと改めて忠告した。

そう言っても私の腕を掴む彼女の力は緩まなかった。そうしながら反対の手で、彼女は自分の服の胸のボタンを外しはじめた。私は玄関のドアをちゃんと開けたままであることを確認し、そんなことはやめるようにと繰り返した。しかし、彼女は服のボタンを全部外すと服の前をはだけ自分の胸を私の方に向けて言った。

「見て下さい」

誘惑しようとしているのかとばかり思っていたが、それは間違いだった。肩から胸にかけての色白の滑らかな肌は思わず触れたいくなるほどだったが、乳房や腹の辺りはそれとは全く異なる濃淡のない灰色に変わっていた。臍を中心にコンパスで引いたような正確な灰色の円が体に描かれていた。乳房や腹の膨らみはその円の縁で消滅している。尋ねると、灰色の部分は触っても何も感じないのだという。これは命にも関わるだろうことは医者でなくても分かった。すぐに医者に行きなさいと今度は命令し、救急病院に電話をしようとしたのだが、彼女は手を伸ばしてきてそれを止め、自分でしますから電話はやめてくださいと言った。そのとき女の手には歯の噛み跡で記された言葉がはいきりと見えた。電話するのを止めるために近づいた彼女はそのまま裸の胸を私の体に押し付けてきた。私は穏やかな言葉を幾つか選んで彼女に無理やり押し付け、これでしばらくは落ち着きますからと言い、慌てて玄関を出た。山道を下りあの家が見えなくなる直前に振り返ると、まだ開いたままの玄関のドアから、全裸になってじっとこちらを見つめている彼女が見えた。さらにその家から五分くらい離れたとき、上司から連絡が入った。本社の方に今の客からクレームがあがったのだという。勿論、対応マニュアルに従って、一部始終を録音していたことを告げたら、上司は満足して電話を切った。

倒木の上に座り、手帳を取り出して訪問の次第を記録した。あんなふうになるのはどんな言葉のせいだろうか。勿論、言葉だけではあそこまでひどくはならないだろう。あのままでは全身が灰色に変わってしまい命すら失くすだろう。手を噛んで残した「円周より東側」という言葉もメモした。家に他の住人の気配はなかったが、亭主はどうしているのだろうか。ずっと隠し続けてきたのだろうか。そんなことを考えはしたが、記録すればすぐに忘れられる。この仕事を続けて身につけた技術だった。

工場はすぐそばに近づくまでまったく存在しないかのようだった。木の葉が視界を遮ると同時に機械音も吸収してしまうのだろう。町では耳にすることのないその音がどんな機械から生まれるのか、私にはまったく分からなかったが社長に工場で作っているものが何かを聞いたことはない。この仕事に就いて以来、顧客のプライベートには触れないと決めていた。

「言真君。よく来てくれた」

工場の隣に建てられた管理施設に入ると私の顔を見るなり社長がそう言った。小柄だが筋肉質の体で活気にあふれた社長は会うたびにそんな調子だった。遠くまで届く声は自信に満ちていて、体調のよくないときに聞いたら余計に具合が悪くなるだろうと思える。

最近の景気や町で起きた爆発事件で私の車が壊されてしまったことなどを話している間も社長が早く新しい言葉を見たがっているのは分かっていたが、私はわざとその話を避けていた。普段はそんなことはしないのだが、三つ年下でありながら成功したこの社長は何故か私の前では子供のように無邪気にふるまう。それで、ついついからうような行動をとってしまう。勿論、客なので度を越えたことはしないが、私もどこかしら気を許しているのかもしれない。

前回注文を受けていた新しい言葉を二箱と私が見繕った言葉を一箱、テーブルの上に積みあげると社長の顔は輝いてまるでおもちゃをもらった子供だ。さっそく箱の中の言葉を幾つか取り出して嬉しそうに眺め、たぶん工員の誰かの声だろう声で発話してみせる。似ていたのか大声で笑ったあと、私に向かってこんな言葉が欲しかったのだと言う。社交辞令ではなく本心だというのはよく分かっている。私のような仕事ではいろいろ不愉快なことがあるのは仕方ないが、こんな瞬間があるとその仕事を選んでよかったと本気で思う。

「支払いのことだけれど」

と、社長が言いにくそうに口を切った。

「月末でいいかな」

これまではいつも現金で払ってくれていたのが驚いたが、今月はちょっと間に合わなくて社長は言い訳を口にした。かまいませんと私は答え、どこも景気がよくないですねと付け加えた。

やがて外が暗くなってくると、社長は約束を覚えているかと聞いてきた。勿論、覚えている。

これまでも何度か誘われていたが、都合がつかずにいた。今日はおつきあいしますと答えると、社長はまた嬉しそうな笑顔になった。こんな田舎に「話せるクラブ」があるとはなかなか信じられない。今日は帰りの切符も買っていない。

工場を出ると日は急速に翳っていった。日が暮れるとともに、山を覆う茂みは深くなり木の葉が山道を隠してゆく。足早に先を急ぐ社長に、こんな所に置いて行かれたら帰れなくなりますと言うと、社長は俺だってだと、かえって不安になるようなことを言った。社長の後について三度角を曲がるとそこに店があった。

入り口の上には大きな文字で「話せるくらぶ」という店の名前が輝いていた。ドアの両側に店の女の子が一人ずつ立っている。店の名前の電飾の光を浴びておそらく美しさが何割か増しているのだろう。私たち二人を試すような視線で見つめている二人の大きな黒い瞳から私は目が離せなくなっていた。店に入ろうとすると女の子は素早くすり寄ってきて腕を組む。弾力のある胸を腕に感じながら店の中に案内された。社長の腕を取ったのが赤、私についたのが白だと名前を言った。赤は赤いロングドレス、白は白いミニのドレスを着ているので、名前はすぐに覚えられた。体が近づくと二人から獣のようなにおいが漂ってきた。何の動物のおいなのか思い出せそうでいてなかなか思い出せない。あきらかに動物園のおいだ。本来なら動物の糞や腐りかけた残飯のおいが混じり合い、決して好ましいにおいであるはずはないのだが、店に入ったとたん、何故かそれがセクシーで心を癒すにおいのように感じられる。

店の中は思ったよりも広かったが、うまく配置された照明が隅々に影を落とし、店の半分を暗がりの中に隠して、こじんまりとした店だという印象を与えるように工夫されていた。既に幾つかの席には客が入っていたが静かだった。店に音楽は流れていなかった。社長が一番奥の席で注文をつけたので、席にたどり着く途中、客のいる席に近づく度にその客に紹介された。

「こちらは大学の先生。ご専門は」

赤にそう振られた客はしょうがないなという表情を浮かべて答えた。

「理論言語学です。よろしく。この町にはよくいらっしゃるんですか」

私の体を誰かが押して、その質問に答える暇もなく先に進まされた。

次の席では客と話をしていた店の女の子が紹介してくれた。

「こちらは小説家をなさってるの」

小説家は何も言わずうなづいただけだった。テーブルの上に「禁自費者の微笑み」という本が置いてあった。まちがいなく彼が書いたものだろう。

次の席にはまだ女の子がついておらず、今度は白が紹介する。

「そして、こちらは考古文法学者のおじさま」

「どうも。最近、この町でも会話の声をよく聞くようになりました。あなたのおかげですね」  
誰かが私の代わりに自己紹介をしてくれたらしい。私はありがとうございますと言いながら店の奥へと向かった。

店の一番奥の席は影の中に隠れていて周りからは見えない。席について、社長や女の子たちに店の名前は「クラブ」でなく「くらぶ」なのですねと言うと、そう言うのを待っていたかのようになり店の主人が現れた。

「お気づきになりましたか。実はわたし、かたかながまったくだめなんです」

主人は頭が天井にぶつかりそうになるほど長身で、座った私たちを天井から見下ろしながらそう言った。しかし、次の瞬間には床に膝をつき、下から見上げながら話しかける。

「店の名前にかたかななんか使ったら、熱がでてすぐに閉店だわ」

見た目では分からなかったが、主人は女性なのに違いない。社長は主人に私を紹介したが、それは形だけで、主人は私のことをあらかじめよく知っていたようだった。気がつくやうに店の女の子たちがみんな集まっていて、私と話をしたがっているようだ。ただのセールスマンだと言っても、女の子たちは何か憧れの人を見るような眼差しで私を見つめている。

大勢が集まってきたので女の子たちから漂う獣の匂いはきつくなり、私は白のにおいが黒豹のものだということ思い出した。他の女の子たちのにおいとはっきりと区別がついた。赤はシマウマで、他にはイリオモテヤマネコ、ライオンの子供、桃色のうさぎなどもいたが、草食動物は少ないようだった。頃合いを見て主人が席を外すと女の子たちも下がり、白と赤だけが残った。

はじめ社長と赤は最近発見された古代の言語について話し合っていたが、ふと気がつくやうに何をしているのか分からなくなっていた。こんな山奥の話せるくらぶでも同じなのだと思いながら、白とは名詞の態について話してみた。意外にも彼女の文法に関する知識は確かなもので、私も仕事柄詳しい方だが、使用頻度の少ないあまり知られていない名詞の態の変化についても、尋ねればすぐに答えてくれた。子供の頃から言語に興味のあった私には文法の話は楽しく、たちまち話に夢中になってしまった。

その女の子が傍に立っていることに突然気づいた。爪の小さな細い指が、白の肩に添えられていた。他の客が白を呼んでいるのだという。白はごめんなさいと言い席を離れた。社長はテーブルの反対側の陰で赤を抱きしめ、一つの生き物のように体も頬もピッタリとくっつけあっていた。ひとつの生物になってすら二つの口だけが別の意志に従い違う形に動いてい

た。

女の子は自分を縞だと名乗った。彼女も服が縞模様だったので名前はすぐに覚えられた。縞のにおいはシマウマではなく、何か爬虫類の涼しそうなにおいだった。縞は文法の話はできないけれどと正直に言うと、この店をどう思うかと質問した。

「大きすぎず狭すぎず、丁度よい広さだね」

「嫌だわ。そうじゃなくて、女の子たちのことです」

「ああ。みんなよく勉強していて、話しやすいと思うよ」

「ふうん。他の町のくらぶも、こんななの？」

「町によって違いはあるけれど、客はみんな話がしたくて来るんだから、話せばそれでいいのさ」

「でも、話し相手が動物ばかりでいいのかしら」

そう言われ改めて店内を見回すと、確かに、話し相手をしている女の子たちは、どれも動物だった。

「ああ。それでようやくわかったよ。君たちは言葉を与えられて店に出ているんだね」

「ごめんなさい。店の主人に口止めされてて。でも、滅星さんは言葉のセールスをされているんだから、隠せるわけないわよね」

「あやまる必要はないよ。話せばいいのさ。法にふれるかどうかは、私も分からないんだ」  
私はこれが違法だということを知っていたが、こんな山奥にまで法律が及ばないことも分かっていた。

動物にも言葉を与えれば客をもてなすことができる。おそらく動物は純真だからだろう。だが、果たして動物が本当にその言葉の意味を理解しているのかどうかは分からない。話しているながら、天井を飛び回る虫をじっと見つめたり、床の渦巻き模様に気を取られたりするの、やはり動物だからだろうか。しかし、白といいこの縞といい、私にはちゃんと話ができるとしか思えなかった。特別な言葉を処方しているのかもしれない。

社長と赤の古代言語に関する議論に、いつのまにか他の席にいた考古文法学者も加わっていた。通じないはずの言葉も考古文法学者にとっては知り尽くした言葉の一つでしかないのだろう。赤は頬を赤く染め、汗で髪を濡らしながら何かを力説している。シマウマの長い顔が切なそうに左右に振られていた。じっと赤を見つめていたら、縞が赤でなく自分を見て欲しいというように私の腕に触れてきた。そして私が縞の腰に手を回そうとしたとき、店のドアが大きく開かれて賑やかなものたちが入ってきた。



最初に入ってきたのは交通標識の『一方通行』だった。店に一步はいると『一方通行』は立ち止まり、甲高い声で口上を申し述べた。

「古今東西。八面六臂。獅子奮迅の諸行無常。言葉まみれの動物並びに意味の足りない霊長類のおん皆様。今宵もやってまいりました。おとずれました。さまよえるものどものメリーゴーランド。いき場所のないものことば。さあさ、ご覧ください読んでください」

ここまで言うと『一方通行』は店の奥へと駆け込んだ。その後からは、『行き止り』と『80』が続いて入ってきた。二つの標識は手を取り合い輪になって回りながら、交通安全の歌を歌っている。リフレインの「だから僕たち安全第一」のところでは、店にいる全員が声を合わせて歌った。やがて歌が一段落すると、すこし膨らんで大きくなったように見える入り口から、体を屈めた大柄な信号機がゆっくりとした動きで入ってくる。入り口を通り抜けて全身をみせると、客たちは歓声をあげた。信号機は三つの色のすべての組み合わせでランプを点滅させた。店の女の子たちはそれを自分に向けられたウインクだと思い込み、顔を真っ赤にする。明日の朝までに信号機の精を受けて孕んだ女の子が何人もでてくるのだろう。信号機が店の中に消えると、一行の最後に入ってきたのは、国語辞典だった。しかし、大柄な信号機の後だったので、誰も国語辞典の登場には気づかなかった。誰も見ていないことを確かめると、国語辞典は肩をすくめてからこそそと店の奥に駆け込んでいった。

物たちの登場で笑いがひろがり、店の中は急に賑やかになった。信号機と国語辞典と一緒に端の方の席に着いたが、道路標識の三つは顔見知りだったらしい作家の席に加わった。そしてしばらくすると、そのテーブルで着せ替えごっこが始まった。着せ替えごっこというのは、近頃、話せるくらぶで流行りのゲームだ。クジを引いて選ばれた一人がその場に立つ。それから他の面々が思いつく修飾語を言い、立った一人はその言葉に修飾されなくてはならない。どうしてもできないと、罰ゲームになるのだという。

さっそく作家が起立し、着せ替えが始まった。

「やかましい」

『80』が言うと作家は喉を枯らして大声をあげ、テーブルを叩き、足踏みをする。クリアーと道路標識が声をあげた。

次は『一方通行』が言った。

「青ざめた」

少し考えてから作家は店の主人に命じて冷蔵庫から大量の水をテーブルに山積みさせ、そしてその中に潜り込んだ。服は脱いでいて、氷の山から首だけを出している。そのまましばらくすると作家は言われた通りに唇まで青ざめ、激しい震えが止まらなくなった。肌の色が青ざめているのを見届けると『一方通行』は作家を氷の山から発掘し暖かい毛布で包んだ。そ

して作家の震えが収まり再び起立したところで、クリアーの声があがった。

最後の『行き止り』は、意地の悪い雰囲気を漂わせ言い放った。

「偽りの」

作家は一瞬迷ったようだが、その場所に立ったまま何もしなかった。標識たちはしばらくその様子を見てから、標識の少しかすれかけている記号を微かに震わせくすくすと笑って、許してやるよと言った。それから声を揃えてクリアーの声をあげる。あれは作家自身がいつも偽りばかりだと言う意味なのだろうか。着せ替えごっこは、部外者が見えてもよく分からないものだ。次に『一方通行』がクジに当たって立ち上がったが、それから後のやりとりはよく聞き取れなかった。ただ楽しそうな笑い声だけが聞こえていた。

それにしても、物に言葉を与えたのは誰なのだろうか。それは犯罪であり、こんな山奥でも例外にはならないはずだ。私は縞にあれはどこから来たのかと尋ねた。

「標識のこと？ ふふ。よく分からないけど、半月くらい前から来るようになったの。毎晩このあたりの店を回っているらしいわ。どこに住んでいるのかは知らない。誰もそんなこと聞かないし、自分から話したりするわけないものね。そんなことより、あなたのことをもっと知りたいわ」

そう言われて自分のことを話そうとしない者はいないだろう。私は物のことは忘れて、自分の誕生から今までのすべてを話し始めた。やがて話が幼年期の終わりに差し掛かる頃、ふと気になって、熱心に耳を傾ける縞の顔を見ながら、尋ねた。

「こんな話で楽しいの？」

「ふふ。もちろんよ。あなたのすべてを知りたいわ」

そう言って縞は私に体を摺り寄せてきた。縞の涼しげな爬虫類の体臭が私のすべての感覚を包み込み、私は縞以外のものが何も見えなくなる。縞のなめらかで透明な肌が私の頬に触れ、唇を近づけてくる。瞳の奥を見つめ合い、重ねた唇の間から熱くなった舌がお互いの口の中に忍び込む。舌はゆっくりと動いて相手の口の内側を確かめている。やがて舌が唾液に溶けて混ざり合い、熱く煮えたぎった液体となって喉の奥を侵しはじめる。喉の粘膜から忍び込んだ熱は脳の中に染み透り、その熱が脳に達したとき、私はそれに含まれていた縞の思いをすべて理解し、同じように縞が私の欲望を知り尽くしてしまったことも分かった。

縞が少し微笑み、椅子から体をずらしてテーブルの下に沈んでいった。縞の手が伸びて私の腕をとり、同じ場所に来るようにと誘っている。縞の触れた上腕部分が熱くなり、それから心地よく痺れ、私の欲望を掻き立てているのが分かった。テーブルの下を覗き込むと闇の中に縞の二つの目が輝いている。私はその光に近づこうと椅子から滑り降りてテーブルの下に潜り込んだ。床を這い縞に近づく。縞のにおいに包まれて私の全身は熱くなる。私の伸ばした手

が縞模様のドレスの胸元に滑り込む。すると意外なことに縞は体を遠ざけようとする。私の指は縞のドレスに絡みつき、縞を逃がそうとしない。しかし縞が無理に体を離そうとしたので、テーブルの下で闇の中でドレスの布地が大きな音を立てて裂けてしまった。その音が私の熱を冷ましたのだろう、私は縞から手を離しあわててテーブルの外に出た。縞もすぐに、裂けたドレスの前の部分を両手で抑えながら椅子の上に現れた。何か恥ずかしそうにしている。悪かったねと私は言い、縞が構わないというように頭を振ってみせた。

「あら、破けちゃったわね」

店の主人がおどけたような口調でそう言いながら近づいて来たが、目は不機嫌そうに見えた。私が主人を見ずに縞の方へ視線をそらすと、主人は着替えるように言いながら縞の腕をとり、席を立たせた。そのとき、布地を押さえていた縞の手が外れ、隠されていた真っ白い肌が曝された。私は縞が何を隠そうとしていたのかを理解し驚いた。想像通り縞の体は大蛇だったが、その皮膚には蛇特有の意味ありげな模様はなく、なめらかな女の体をしていた。そして、服に隠されていた縞の体は既にほとんどが濃い灰色に変わっていて、その灰色の部分は折り紙でできているように薄っぺらになって見えた。店内の照明が揺らめくと、その灰色の折り紙は風に吹かれているように、頼りなく揺れた。

それでも、それが見えたのは一瞬だった。店長が目配せをし、駆け寄って来たピンクのドレスの女の子が縞の頭からシーツを被せたからすぐに見えなくなってしまったのだ。店の中で縞の体を見たのは私と店長と、おそらくピンクという名前のその女の子以外にはいなかっただろう。

縞がいなくなってから後のことはよく覚えていない。縞はもう二度と店に現れなかった。代わりに私の相手をしたのは、あのピンクのドレスの女の子だった。名前はピンクではなく桃だったが、もう、私は女の子がどんな動物なのかを知りたいとは思わなかった。桃とは何か他愛もない話を続けてその夜の残りを過ごした。着せ替えごっこは、いつまでも続けられ、作家と三つの標識は何重にも修飾され重ねられた言葉の下敷きになり、とっくに動けなくなっている。重なった修飾語が光を遮るので、その下にいるものは元の姿が何だったのか分からない。社長と赤と考古文法学者は話し疲れたのだろう、テーブルにうつ伏せになって眠っている。

いつのまにか朝になっていた。入り口のドアを開けたのは店の主人のはずだ。ドアの向こうから山鳥の声が聞こえた。

「さあ、今日はこれでお開きよ」

主人の声に促されて、話に夢中になっていた客たちは話を切り上げ思い思いに店を出ていった。誰もが夜通しの対話に興奮した表情で、家に帰ってもすぐには眠れないだろう。大きな声で別れの挨拶をしている。

社長と文法学者ももつれ合うように席を立ち、店から出ていった。私が最後の客になった。主人は微笑みながら近づいて来て、代金を書いた紙をテーブルの私の目の前に置いた。社長は支払いをわざと忘れて帰ったのだろう。そうなるかも知れないとは思っていた。金額を見ると私と社長が女の子たちと交わした対話の代金は思ったよりも安く、これなら必要経費で落ちるはずだった。縞のことは何も言わずに、私は清算を済ませた。

「もうすぐ始発の時間」

主人がそう言って私をドアから送り出すと遠くで列車の警笛が鳴った。

帰りの列車の中で、私は手帳に社長の分の売り上げ明細を記録した。支払いが月末になると、今後の社長の支払い能力についての注意書きも付け加えた。この山の町の商売ももう終わりに近づいているのかも知れない。そう考えながらしばらく眠った。車両には他に誰もいなかった。